

【 復活のトロパリ 第4調 】

しゆのおんなでしはふくかつのひかるおと
主女弟子は復活光音

づれをてんしよりにききうけえて、
天使聞き受

げんそよりのていざいをふるいすて、しと
原祖定罪を振棄使徒

にほこりていえり、しはほろぼさ
誇り日死滅

れ、ハリストスカみはふくかつして、せかいに
神は復活して世界

おおいなるあわれみをたまえり。
大憐賜

【 生神女誕生祭のトロパリ 第4調 】

しょうしんどうていぢよおよ、なんぢのうまれ
生神童貞女およ、爾の誕生

はぜんせかいによろこびをしらせたりに、け
全世界に歡喜を知蓋

だしなんぢよりぎのひたるハリストスわがかみはかが
爾より義日我が神が輝

やけえり。かれはのろいときてしゆく
彼詛を解祝

ふくをあたえ、しをほろぼしてわれらに
福與死滅我ら等

え い えんの い の ち を た ま え り 。
 永 遠 生 命 賜

【 復活のコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す 、

わ が き ゅ う せ い し ゅ お よ び し ゅ く ざ い し ゅ は か み と
 我 救 世 主 及 贖 罪 主 神

し て 、 ち に う ま れ し も の を か せ よ り
 地 生 者 を 桎 梏

と き て 、 は か よ り ふ く か つ せ し め 、
 釋 墓 復 活

ぢ ご く の も ん を や ぶ り て 、 し ゅ さ い と し て
 地 獄 門 破 主 宰

み っ か め に ふ く か つ し た ま え り 。
 三 日 目 復 活 給

【 生神女誕生祭のコンダク 第4調 】

い ま も い つ う も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 今 何 時 世 世

し じ ゅ う な る も の お よ 、 な ん ぢ の せ い な る
 至 淨 者 爾 聖

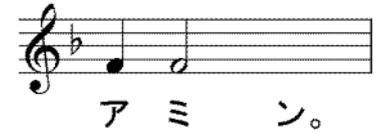
うまれによりて、イオアキムおよびアンナはこ子
 誕生 因 及 子
 なきはぢ、アダムおよびエヴァはしのきゅうか壊
 辱 及 死 朽 壊
 いをまぬかれたり。ていざいよりとかれ
 免 定 罪 釋
 しなんちのたみもこれをまつりて、なんち
 爾 民 之 祭 爾
 によぶ、たいのあれたるものおは
 呼 胎 荒 者
 しょうしんぢよ、われらのいのちのよういくしゃ
 生 神 女 我 等 生 命 養 育 者
 をうむ。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生

しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しよせいじん きとう よ
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、

しゅ よ 、 なんぢ の し わ ざ は なんぞ お お き 、
 主 爾 工 業 何 大
 み な ち え を も っ て つ く れ り 。
 皆 智 慧 以 作

誦經) 我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅ よ 、 なんぢ の し わ ざ は なんぞ お お き 、
 主 爾 工 業 何 大



誦經) ^{しゅ}主よ、^{なんぢ}爾の^{しわざ}工業は何ぞ^{なん}多き、^{おお}



【 ^{アポストロス}使徒經 166 端 コリント前書 16 章 13~24 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒パヴェルが^{じん たつ}コリント人に^{ぜんしょ}達する^{よみ}前書の讀、

司祭) ^{つつし}謹みて^き聽くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{なんぢら}爾等^{けいせい}倣醒せよ、^{しん た}信に^{いさ}立て、^{けんご}勇め、^{およそ}堅固なれ。凡の^{ことあい}事愛を^{もつ}以て^{おこな}行え。兄

^{てい}弟よ、^{いえ}ステファンの^{はつもの}家は^{かつおのれ}アハイヤの^{せいと}初實にして、^{つと}且己を^{さき}聖徒に^{さき}務むることに^{さき}獻げしは、

^{なんぢら}爾等の^し知る^{ところ}所なり、^{われなんぢら}我爾等に^{もと}求む、^{なんぢら}爾等も^か此くの^{ごともの}如き者、^{およ}及び^{およ}凡そ^{じよりよく}助力する者

と、^{きんろう}勤勞する者^{もの}とに^{ふく}服せよ。我は^{われ}ステファン、^{およ}フォルトウナト、^{きた}及び^{よろこ}アハイクの^{きた}來りしを^{よろこ}喜

ぶ、^{かれら}彼等は^{われ}我が^{なんぢら}爲に^か爾等の^{ところ}缺くる^{おぎな}所を^{けだしかれら}補えり、^{われ}蓋彼等は^{なんぢら}我と^{こころ}爾等との^{やす}心を^{やす}安ん

じたり。此くの^か如き者を^{うやま}敬え。アシヤの^{しよきようかい}諸教會は^{なんぢら}爾等の^{あん}安を^{およ}問う。アキラ^{およ}及び^{およ}プリス

キラは、^{そのいえ}其家の^{きようかい}教會と^{とも}偕に、^{しゅ}主に^あ在りて^{せつ}切に^{なんぢら}爾等の^{あん}安を^{しゅうけいてい}問う。衆^{しゅ}兄弟^{なんぢら}爾等の^{あん}安を

と^{なんぢら}問う。爾等^{せい}聖なる^{せつぶん}接吻を^{もつ}以て^{たがい}互に^{あん}安を^{われ}問え。我^てパヴェル^{なんぢら}手づから^{あん}爾等の^{しゅ}安を^{しゅ}問う。主

イスス^{あい}ハリストスを^{もの}愛せざる者は「^{ねが}アナフェマ^{われら}」たるべし、「^{ねが}マラン^{われら}、^{ねが}アフア」。願わくは^{われら}我等

の主^{しゅ}イスス^{おんちよう}ハリストスの^{なんぢら}恩寵は^{とも}爾等と^あ偕に^わ在らんことを。我が^{あい}愛も^{あい}ハリストス^{あい}イス

スに^{おい}於て^{なんぢら}爾等^{しゅうじん}衆人と^{とも}偕に^あ在るなり、「^あアミン」。

(比較用 口語訳)

目をさましていなさい。信仰に立ちなさい。男らしく、強くあつてほしい。いっさいのことを、愛をもつて行いなさい。兄弟たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたが知っているように、ステパナの家はアカヤの初穂であつて、彼らは身をもつて聖徒に奉仕してくれた。どうか、このような人々と、またすべて彼らと共に働き共に労する人々とに、従つてほしい。わたしは、ステパナとポルトナトとアカイ

コトがきてくれたのを喜んでいる。彼らはあなたがたの足りない所を満たし、わたしの心とあなたがたの心とを、安らかにしてくれた。こうした人々は、重んじなければならない。アジアの諸教会から、あなたがたによろしく。アクラとプリスカとその家の教会から、主にあって心からよろしく。すべての兄弟たちから、よろしく。あなたがたも互に、きよい接吻をもってあいさつをかわしなさい。ここでパウロが、手ずからあいさつをする。もし主を愛さない者があれば、のろわれよ。マラナ・タ（われらの主よ、きたりませ）。主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。わたしの愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがた一同と共にあるように。

【 アリルイヤ 主日第4調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんべい せいちよく けんべい} 神よ、爾の寶座は世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ ぎ あい ふほう にく} 爾は義を愛し、不法を惡めり、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん
人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ
の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

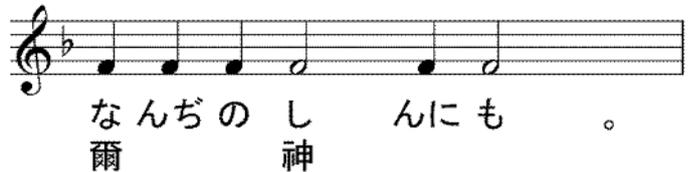
おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

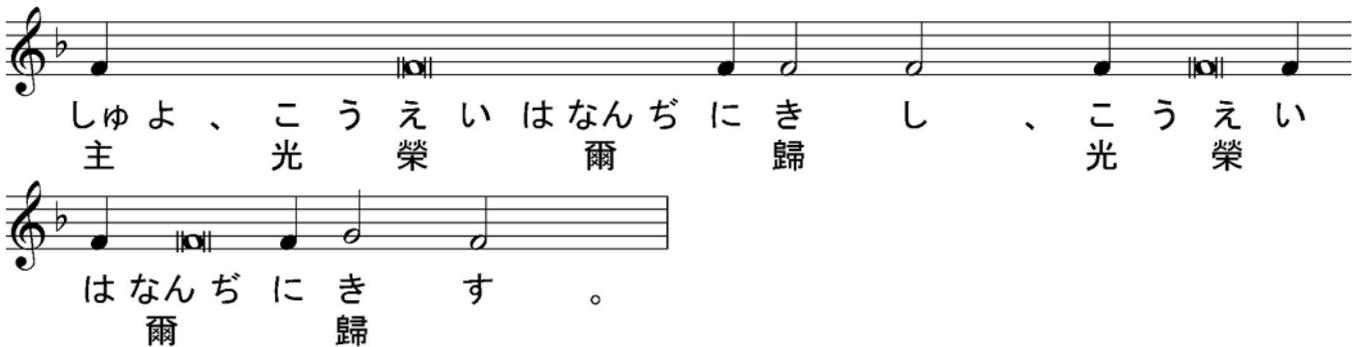
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書87端 21章33~42節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) でん せいふくいんけい よみ
マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き しゅ さ たとえ もう い かしゅ ぶどうえん う これ まがき
謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、家主あり、葡萄園を植え、之に籬を

めぐ そのうち さかぶね ほ ものみ た これ えんてい たく たほう ゆ みのりどきちか
環らし、其中に酒榨を掘り、塔を建て、之を園丁に託して、他方に往けり。果斯近

づきたれば、彼は其果を收めん爲に、諸僕を園丁に遣ししに、園丁は其僕を執えて、

あるもの う あるもの ころ あるもの いし う またた ぼく さき おお つかわ これ
或者を打ち、或者を殺し、或者を石にて撃てり。復他の僕を先より多く遣ししに、之

か ごと おこな つい おのれ こ かれら つかわ い わ こ は しか
にも是くの如く行えり。遂に己の子を彼等に遣して曰えり、我が子に愧ぢんと。然れど

えんてい こ み あいかた い こ よつぎ み ゆ かれ ころ そのしぎょう と
も、園丁子を見て、相語りて曰えり、此れ嗣子なり、往きて、彼を殺して、其嗣業を取ら

すなわちかれ とら ぶどうえん そと ひ い ころ しか ぶどうえん しゅきた と き
ん。乃彼を執えて、葡萄園の外に曳き出だして殺せり。然らば葡萄園の主來らん時、

なに こ えんてい おこな かれらいわ こ あ もの なさけ ほろぼ ぶどうえん もつ た
何をか此の園丁に行わん。彼等曰く、此の悪しき者を情なく滅し、葡萄園を以て他

えんてい すなわちとき およ かれ み おさ もの たく かれら い なんぢら せい
の園丁、即時に及びて彼に果を收めん者に託せん。イエス彼等に謂う、爾等は聖

しよ こうし す いし おくぐう しゅせき な こ しゅ な ところ われら め き
書に、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり、此れ主の爲す所にして、我等の目に奇

い い いま かつ よ
異なりとすと、云うを未だ嘗て讀まざりしか。

(比較用 口語訳)

ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。収穫の季節がきたので、その分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫のところへ送った。すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。しかし、最後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか。彼らはイエスに言った、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」。イエスは彼らに言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
主 光 榮 爾 に 歸 し、 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ (金ロイオアン聖体礼儀) へ